様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　4 月　2 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２０１０～２０１１
課題番号：２２７９２２５１
研究課題名（和文）
認知症高齢者のためのおだやかスケールの開発－おだやかさの程度と得点との関連－
研究課題名（英文）
Development of ODAYAKA(Well-being)scale of dementia elderly people
-The relation of overall impression of ODAYAKA and the total scores-
研究代表者
辻村　弘美（TUJIMURA　HIROMI）
群馬大学・大学院保健学研究科・講師
研究者番号：７０３７５５４１

研究成果の概要（和文）：
認知症高齢者のおだやかスケール（以下20項目改訂版OS）において、施設スタッフによる対象者のおだやかさの全体的印象評価と20項目改訂版OSの総得点の関連を検討することを目的とする。おだやかさの全体的印象と20項目改訂版OSの総得点の相関係数は－0.759（p＜0.01）で強い相関であった。改訂版OSは、因子分析により、「周囲との交流（6項目）」、「自分らしさの発揮（8項目）」、「充実した暮らしぶり（6項目）」の3領域のカテゴリーに分類された。

研究成果の概要（英文）：
The aim of this study was to assess the relation of overall impression of ODAYAKA and the total scores about ODAYAKA (Well-being) scale of dementia elderly people (20 items OS).The correlation coefficients of overall impression of ODAYAKA and the total scores were -0.759(p＜0.01) ,it was substantial. Based on the results of a factor analysis, 20 items OS was classified into 3 domains, and it consisted of 6 items related to “interaction with people around them,” 8 items related to “expression of their own individuality,” 6 items related to ”a substantial life,”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：看護学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：認知症，高齢者，おだやか，尺度開発

１．研究開始当初の背景

認知症高齢者が年々増加している中、認知症のケアの方向性としては、これまでの旧い認知症ケアといわれる問題対処、あきらめのケアから、可能性、人間性指向のケアに変わりつつあり、利用者本位の、その人らしさを大切にするケアが求められている。認知症になっても、在宅で、おだやかに、その人らしい生活を送っている人がいることは、臨床において経験的に認識されている。また、経験

的証拠によって、今や認知機能障害のある人びとの能力とその人たちの良い状態を保つ方法について多くのことが証明されてきている。

研究者は、ポジティブな評価や見地を得やすい、「おだやか」をキーワードとしたスケール開発を考え、平成 19-20 年度の若手（B）（課題番号 19791740）の研究において、３領域 24 項目のおだやかスケールを開発した。その後、本件課題である 22-23 年度の研究においては、評価者間一致率を算出し、一致率の低い質問項目については、質問項目の表現内容を再検討すること、また、ケア提供者から見る認知症高齢者のおだやかさの程度の印象とおだやかスケールの総得点からその関連性を考察することを目的とする。

本研究における「おだやか」とは、単に静かで落ち着いているということではなく、周囲との交流があり、自分らしさを発揮でき、満足した生活を送っている状態と定義した。

本研究は、認知症でもおだやかに、その人らしく活き活きと暮らしていけるというポジティブな方向性を見出しやすい研究であり、将来的には認知症でない方が“認知症になっても安心”といった意識を持てるようになることを目指している。このような意味では、認知症高齢者に対する看護のあり方に示唆を与えられるものであると考える。

２．研究の目的

以下の２つである。

①　３領域 24 項目からなるおだやかスケール（24 項目 OS）評価者間一致率を算出し、一致率の低い質問項目については、質問項目の表現内容などを再検討する。

②　評価者であるケア提供者から見る認知症高齢者のおだやかさの全体的印象評価と３領域 20 項目からなるおだやかスケール（20 項目 OS）の総得点の関連を検討する。

３．研究の方法

１）目的①の方法

対象者１名に対して、２名の評価者が同時期に評価をする、評価者間一致率を算出し、一致率の低い質問項目については、質問項目の表現内容の再検討をした。再検討にあたっては、スペシャリティが老年看護学領域で認知症高齢者の研究を行っている教授よりスーパーバイズを受けた。

２）目的②の方法

高齢者ケア施設を利用している認知症高齢者を対象とした。評価者である施設のスタッフが対象者の日常生活の様子について、20 項目 OS を用い調査するとともに、対象者のおだやかさの全体の印象の程度について、「高い」,「中程度」,「低い」の３件法で評価した。

解析には、統計パッケージ SPSS16.0J を使用した。

３）倫理的配慮

氏名はコード化して施設責任者が台帳に記載,管理することで、研究者に対象者の情報が直接的にわからないように配慮した。施設長の同意と署名を得た後、施設に研究の情報公開文書を掲示し、対象者の家族には研究説明文書を送付した。群馬大学医学部疫学研究倫理委員会（受付番号 22-5）にて承認を得た。

４．研究成果

以下カテゴリーを「　」、評価項目を【　】とする。

１）目的①の結果（表1）

高齢者ケア施設を利用している認知症高齢者39名を対象とした。評価者である施設のスタッフが対象者の日常生活の様子を3領域24項目からなるOS（表１）を用い4件法で調査した。その後、評価者間一致度を検討した。各評価項目の完全一致度が30％代の低いものを中心にTom KitwoodのWell-Beingの指標を参考にその内容を検討した。その結果、完全一致度が30％代でその内容が抽象的で評価しにくいものや状況が把握しにくいものである5項目（「周囲との交流」の【食事を楽しみ和やかに摂取する】、「自分らしさの発揮」の【身だしなみを整えられる】、「満足・活気」の【生き生きしている】、【満足している，満たされているように見える】、【何か楽しめることがある】）を削除し、Well-Beingの指標を参考に「**喜びと苦しみの両方の感情を表現できる**」の1項目を追加、また、「冗談を言って周囲の人を和ませる」から「ユーモアを楽しむことができる」、「やりたいことができる」から「自分の意志や願いを主張できる」、「できる事に達成感，満足感を持っている」から「笑顔で喜びを示す」へと3項目の表現内容の変更をして、20項目改訂版OSを作成した。特に、「満足・活気」のカテゴリーでは評価者間一致度が低かった。全体的に評価者間一致度は高いとは言えず、その原因としては、質問項目の内容が抽象的な内容であることも影響していることが考えられ、評価者から見て評価しやすい表現に書き換えた。

表1　質問項目ごとの完全一致率

		%
周囲との交流	1. 周囲の人と交流がはかれる	59.0
	2. 人の話を落ち着いて聞くことができる	51.3
	3. 気のあう人と一緒に過ごす	63.2
	4. 人のことを気遣える	41.0
	5. 冗談を言って周囲の人を和ませる	△46.2
	6. 小さな子供やペットを愛しむ	47.1
	7. 他者に優しく接する	51.3
	8. 昔話を楽しめる	53.8
	9. 食事を楽しみ和やかに摂取する	○38.5
自分らしさの発揮	10. 自分のペースで日課を過ごせる	48.7
	11. 身だしなみを整えられる	○35.9
	12. 好きなおしゃれができる	43.6
	13. やりたいことができる	△51.3
	14. 人間としての誇りを持っている	42.9
	15. 他人のために何かができる	41.0
	16. トイレで上手く排泄できる	52.6
満足・活気	17. 悲観的でなく前向きに過ごしている	51.3
	18. できる事に達成感，満足感を持っている	△36.8
	19. 生き生きしている	○30.8
	20. 落ち着きがなく，緊張している	59.0
	21. 満足している，満たされているように見える	○35.1
	22. ゆっくりくつろいで過ごす	41.0
	23. 何か楽しめることがある	○30.8
	24. 好きなことに打ち込める	51.3

○：削除項目
△：表現内容変更

２）目的②の結果

対象者86名の平均年齢は85.2±7.0歳、アルツハイマー型が最も多く約6割、要介護度は要介護3が最も多く約３割を占め、CDRは中等度であるレベル2が約４割を占めた（表2）。評価者は計42名で、介護士が全体の98％を占めた。認知症に関わる看護・介護平均経験年数は7.2±4.2年であった。

評価者によるおだやかさの程度の印象と改訂版OSの総得点の相関係数は－0.759（p＜0.01）で強い相関であった。改訂版OSは、因子分析により、「周囲との交流（6項目）」、「自分らしさの発揮（8項目）」、「充実した暮らしぶり（6項目）」の3領域のカテゴリーに分類された（20項目改訂版OS：表3、5）。「充実した暮らしぶり」は、カテゴリーを構成する質問項目の内容を検討して命名した。改訂版OS全体のCronbachα係数は0.94で、各領域のα係数は、「周囲との交流」が0.90、「自分らしさの発揮」が0.90、「充実した暮らしぶり」が0.78であった。

表2．対象者の属性

		n	n=86 %
施設	介護老人保健施設（認知症専門棟など）	20	23.3
	介護老人福祉施設	12	14
	認知症対応型共同生活介護	19	22.1
	通所介護	20	23.3
	通所リハビリテーション	15	17.4
性別	男性	13	15.0
	女性	73	85.0
年齢（85.2±7.0）			
診断名	AD	49	57.0
	VD	11	12.8
	DLB	2	2.3
	その他（不明）	24	27.9
要介護度	1	18	20.9
	2	18	20.9
	3	24	27.9
	4	12	14.0
	5	14	16.3
認知症高齢者自立度	Ⅰ	1	1.2
	Ⅱa	11	12.8
	Ⅱb	18	20.9
	Ⅲa	27	31.4
	Ⅲb	14	16.3
	Ⅳ	12	14.0
	M	3	3.5
CDR*1	0.5	9	10.5
	1	27	31.4
	2	35	40.7
	3	15	17.4

*1 Clinical Dementia Rating

表3　認知症高齢者のおだやかスケール20項目の因子分析

n=342

項目	因子1	因子2	因子3
ユーモアを楽しむことができる	**0.581**	0.179	0.497
昔話を楽しめる	**0.539**	0.381	0.306
自分のペースで日課を過ごせる	**0.513**	0.502	0.107
喜びと苦しみの両方の感情を表現できる	**0.737**	0.148	0.293
好きなおしゃれができる	**0.471**	0.503	0.208
自分の意思や願いを主張できる	**0.743**	0.269	0.160
人間としての誇りを持っている	**0.700**	0.221	0.152
笑顔で喜びを示す	**0.637**	0.108	0.382
他人のために何かができる	0.325	**0.544**	0.412
トイレでうまく排泄できる	0.040	**0.651**	0.117
悲観的でなく前向きに過ごしている	0.418	**0.492**	0.183
落ち着きがなく、緊張している（＊）	0.029	**0.248**	0.157
ゆっくりくつろぐことができる	0.260	**0.449**	0.224
好きなことに打ち込める	0.415	**0.580**	0.192
周囲の人と交流がはかれる	0.269	0.549	**0.541**
人の話を落ち着いて聞くことができる	0.297	0.432	**0.522**
気のあう人と一緒に過ごす	0.229	0.491	**0.533**
人のことを気遣える	0.319	0.450	**0.676**
小さな子供やペットを愛しむ	0.536	0.100	**0.530**
他者にやさしく接する	0.292	0.274	**0.770**
累積寄与率（%）	**21.579**	**38.658**	**54.587**

最尤法，Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法
（＊）は逆転項目

表 4　各領域間の信頼性分析

alpha=0.94	alpha	Corrected Item Total Correlation	Alpha if Item Deleted
			n=342
周囲との交流(6項目)	0.90		
1.周囲の人と交流がはかれる		0.76	0.87
2.人の話を落ち着いて聞くことができる		0.69	0.88
3.気のあう人と一緒に過ごす		0.70	0.88
4.人のことを気遣える		0.82	0.86
6.小さな子供やペットを愛しむ		0.60	0.90
7.他者にやさしく接する		0.78	0.87
自分らしさの発揮(8項目)	0.90		
5.ユーモアを楽しむことができる		0.68	0.88
8.昔話を楽しめる		0.68	0.88
9.自分のペースで日課を過ごせる		0.63	0.89
10.喜びと苦しみの両方の感情を表現できる		0.75	0.88
11.好きなおしゃれができる		0.63	0.89
12.自分の意思や願いを主張できる		0.75	0.88
13.人間としての誇りを持っている		0.68	0.88
17.笑顔で喜びを示す		0.66	0.89
充実した暮らしぶり(6項目)	0.78		
14.他人のために何かができる		0.62	0.72
15.トイレでうまく排泄できる		0.42	0.77
16.悲観的でなく前向きに過ごしている		0.59	0.73
18.落ち着きがなく、緊張している(＊)		0.30	0.79
19.ゆっくりくつろぐことができる		0.60	0.73
20.好きなことに打ち込める		0.65	0.71
(＊)は逆転項目			

表 5　20 項目改訂版 OS

1. 周囲の人と交流がはかれる 2. 人の話を落ち着いて聞くことができる 3. 気のあう人と一緒に過ごす 4. 人のことを気遣える 5. 小さな子供やペットを愛しむ 6. 他者に優しく接する	周囲との交流
7. ユーモアを楽しむことができる 8. 昔話を楽しめる 9. 自分のペースで日課を過ごせる 10. 喜びと苦しみの両方の感情を表現できる 11. 好きなおしゃれ (化粧,髪型,服装,持ち物)ができる 12. 自分の意思や願いを主張できる 13. 人間としての誇りを持っている 14. 笑顔で喜びを示す	自分らしさの発揮
15. 他人のために何かができる 16. トイレでうまく排泄できる 17. 悲観的でなく前向きに過ごしている 18. 落ち着きがなく、緊張している 19. ゆっくりくつろぐことができる 20. 好きなことに打ち込める	充実した暮らしぶり

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
① 辻村弘美,小泉美佐子、認知症高齢者のおだやかスケールの開発、Kitakanto Med J、査読有、60 巻、2 号、2010、p.119-134

〔学会発表〕（計 3 件）
① 辻村弘美,小泉美佐子、認知症高齢者のおだやかスケールの開発 20 項目改訂版スケールの評価者間一致率の検討、日本老年看護学会第 16 回学術集会、2011.6.11、NS スカイカンファレンス（東京都）

② 辻村弘美,小泉美佐子、認知症高齢者のおだやかスケールの開発-well-being の指標をふまえた改訂版スケールの作成-、日本老年看護学会第 15 回学術集会、2010.11.6、ベイシア文化ホール（群馬県）

③ 辻村弘美,小泉美佐子、認知症高齢者のおだやかスケールの開発-評価者間一致率からの考察-、第 11 回日本認知症ケア学会、2010.10.23-24、神戸国際展示場（兵庫県）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
辻村　弘美（TUJIMURA　HIROMI）
群馬大学・大学院保健学研究科・講師
研究者番号：７０３７５５４１

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者
小泉　美佐子（KOIZUMI　MISAKO）
新潟県立看護大学・教授
研究者番号：５０１７０１７１